

新年のご挨拶

(長崎歴史文化協会会長) 久保 博之

平成十八年を迎え、謹んで御祝辞を申し上げます。旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の研修旅行などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度の県市内外よりの来訪者は約三千八百人を数えました。また、平成元年以来発刊してまいりました、特集「ながさきの空」も本年で第十七集となります。

今年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の発展に寄与したいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

戌(イヌ)年によせて

越中 哲也

新玉の年たちかえり 一万は九つ 筥王は七つにぞなりにけり……曾我物語の中の文章である。私は正月になると何故か此の文章を何時も思いだす。

さて、今年も旧暦でいうと丙戌の年となる。我が国では之を「ヒノエ・イヌの年」と呼んでいる。丙の文字は中国の暦法で十干の一つであり、戌は十二支の一つで、この干支を組み合わせて中国の暦法はつくられている。中国の暦法は甲子の年を出発の年とし、一周すると六十年を要し、六十一年目を還暦と言ひ、祝ひ日としている。

十二支とは、子・丑・寅…の文字をあて、更に十二の文字には動物をあて、子は鼠、丑は牛、寅は虎…として示している。何故子が鼠に、

は、脱また減と韻通じ実を拂い落し、亥(いのしし)は核に通じ次年の核を残すと説明してある。

その「戌」の文字にあてられた動物は犬である。そこで中国で暦に関するかぎり「戌」の文字を犬年と解する事になっている。そこで犬の文字をたずね諸橋先生の大漢和辞典の犬偏をみると、其処には先ず犬の古字は牙と句の組み合わせて作るとある。牙は犬の型よりきており古字は大、それに音をあらわす句の文字をつけ狗となったと記す。

また、犬の種類によって犬の文字があるという。其の一例をあげてみることにした。

頭は黒で体は黄色の犬 狂。虎をおう犬 狺。雑毛の犬 狺。尾の短い犬 獬。人にかみつく犬 狺。短い尾の犬 狺。強い犬(狂犬) 狺。きちがい犬 狺。脛の短い犬 狺。猛き犬 狺。はげしい犬 猛。口の短い犬 狺。尾の短い犬 狺。……

神社に行く时必须石造の獅子と狺犬がいる。「左・獅子は口を開き、右・狺犬は口を開かず角あり」(類聚雑要抄)とあり、佛教でいう阿吽の事(始めより終りまでという意味)を現わしているという。この霊獣を宮中で置くようになったのは奈良時代からであると言う。獅子は中国系霊獣で狺犬は中国以外の国(北方・蒙古・韓国等)の霊獣であるとされている。この方面を研究され発表された論文に前長崎諏訪神社宮司上杉千郷氏発表の「宮中儀礼における獅子狺犬成立の思想」(神道史論叢・昭和五九・図書刊行会刊)がある。

二

長崎の美術工芸で最初に描かれている犬は南蛮屏風に登場してくる。南蛮屏風の製作年次を十六世紀末より十七世紀初とすれば、其の間にポルトガル船が入港した町は長崎のみであり、其のポルトガル船の人達が上陸している市街は長崎の街と考えるとよいようである。そして其の町の風景の中に洋犬が描かれている。

私は今、神戸市立博物館所蔵の南蛮屏風や大阪南蛮文化館所蔵の南蛮屏風の図録をみている。其処にも街中を走り廻る首輪をつけた犬や、大きな傘の下を歩くカピタンの召使が、二匹の白と茶色の犬に首紐をつけ、

丑が牛になったかと言う事については、孔子の時代よりすでに其のようになっており、其の理由は不明であると言う。之の中国の暦法が我が国に伝えられ、本格的に使用されるようになったのは一四〇〇年前の明日香時代からであるという。

中国の暦法を使って戌年となるのは平成十八年一月二十九日が旧暦(中国暦)の一月一日となるので、それまでは酉(トリ)年であるという。

次に戌の文字を考えてみよう。本来戌の文字は十二支の一つで天体と関連がある。其の二、三を説明すると、子(ねずみ)は春の滋をあらわし、次第に成長し卵(うさぎ)となり、未(ひつじ)は万物成長し滋味あり、酉(とり)は飽と韻が通じ万物できあがる。戌



長崎古今集覧名勝図絵より

お伴をしている様子が描かれている。多分その頃、長崎の町にはこのような洋犬が飼われていたのであろう。又東京細川家蔵洋人奏楽図や大阪南蛮文化館蔵の狩獵図にも白黒まだらの洋犬が描かれている。

○長崎出島のオランダ屋敷内にも洋犬が飼われていた事は、石崎融思や川原慶賀の蘭館図をみても其の中には必ず犬が描かれている事で了解されるが、洋犬を多く取りあげて描いているものとしては「長崎古今集覧名勝図絵」をみられるとよい。

それを見ると出島の犬は洋犬で、何かきれいな首輪がはめてあり、テールブルのすぐ近くにいたり、玉突部屋では台の下に丸くなって寝ている。又他のページには三匹の図があり次のような説明書が記してあった。蛮国の飼犬 容形は瘦身・耳太くたれ、口広く様子也。咬み合う至つて弱く狩犬等に難成也。是に綱を掛ける程 犬・和犬より少し太し、此狩犬至つて妙。オランダ語・保舞登と云う。

○長崎版面をみていたら其処にも犬が多く描かれていた。其の中でも一きわ目だった大きな洋犬を描いたものとしては長崎文錦堂が文化元年(二八〇四)九月七日ロシア皇帝使節が長崎に入港し、梅ヶ崎の地に一時、宿舎を許され上陸している図があり、其の版面にはロシア人と大きな洋犬が描かれ、次のような文が記してある。文化元甲子年九月七日ロシア国より使節の役人 長崎にはじめて渡来 同二年三月十九日出帆す。

使節名 ニコラア レサノツト
此獸 彼国エモ居ルヨシ 依テ写ス 名レーウーと唱フ

長崎勝山町 文錦堂版

この他、長崎の犬の工芸品としては、国宝崇福寺大雄宝殿内に置かれている木彫十八羅漢の一人は犬をつれていて、市文化財桶屋町傘鉾の幕には十二支の刺繍があり、其の中にむつまじい親子・三匹の犬が刺繍されている。また長崎三菱造船所内占勝閣には山本芳翠筆の十二支油絵があり其の中にも犬が描かれている「祇王」図がある。

(長崎歴史文化協会理事長)

